

横山ゆずり作「イースター・ドラマ 一粒の麦」

< 前編 >

- (効果音) (活気のある会社内のざわめき 話し声や電話の音など)
- 秋山 真二 それじゃ部長、例の案件は前向きに進めてよろしいですか。
- 部長 ああ、進めてくれ。ああ、それから秋山君、山田物産の方も、明日の会議で検討したいから、資料をそろえておいてくれるか。
- 秋山 はい、かしこまりました。
- 女子社員 秋山係長、お電話です。
- 秋山 ああ、今行く。
- (効果音) (社内のざわめき F0) (帰宅途中 電車の音)
- 秋山(モノローグ) 今日も終電か.....。
- ナレーション おれは秋山真二。世間では一応大手と言われる商社に勤務するサラリーマンだ。係長というポストは、年齢の割には悪くない。まあ、順調に出世しているほうだろう。でも長引く不況のあおりで、我が社にもリストラのあらしが吹き荒れ、「明日は我が身か」と皆ビリピリしている。残業続きでくたびれ切って深夜の帰宅。最近、子供の寝顔しか見られない毎日だ。
- (効果音) (家路 靴音 玄関のカギを開ける音)
- 秋山 (大きなため息 カバンをドスンと置く音)もう1時半か。
- 秋山の妻 (眠そうな声で)ああ、あなた、お帰りなさい。お食事は？
- 秋山 何だ、起きてたのか。飯はいいから気にしないで先に休んでいいぞ。
- 妻 そうはいかないわよ、心配なもの。こう毎晩毎晩遅いんじゃない、体壊すわ。もう20代のように若くないんですからね。
- 秋山 しょうがないんだよ、リストラで人が減っても仕事は減らないんだから。「文句があるなら、いつでも辞めていいぞ」っていう空気だからな。
- 妻 仕事もいいけど、少しは体にも気をつけないと。.....あ、そういえば、あなたあてに郵便が来てましたよ。はい、これ。
- 秋山(モノローグ) 青春高校第31期同窓会.....(と言いながら封を切り、紙面を取り出して開く) 同窓会かあ。卒業して...15年だけど、もうずいぶん顔を出してないなあ。「同窓会名簿」、へえ、気が利いてるな、みんなどうしてるんだろう。(ページをめくる)3年B組...っと。「相沢正、東都銀行。」相沢は「東都」だったっけ、あそこも大変だろうなあ。「鈴木幸治、鈴木工務店。」鈴木のやつ、嫌だ嫌だって言ってたけど、結局親父さんの跡を継いだんだ。.....ふーん、海外駐在のやつも結構多いなあ。.....「渡辺幸一郎、永眠」...えい、み、ん...!? 渡辺.....亡くなったのか!?うそだろ、そんな.....。あいつが、渡辺が死んだなんて...

....

ナレーション 渡辺幸一郎は、高校2、3年の時の同級生だった。それほど仲が良かったわけじゃない。部活も違ったし、遊び仲間でもない。だけど、何となく気になるやつだった。何て言うか、こう、体育会系のおれたちにはない、落ち着いた雰囲気があって、ある意味でみんなに一目置かれていた。

秋山(モノローグ)同窓会に行ってみるか。

(効果音) (パーティーの雰囲気 BGM ざわめきなど)

相沢 よう、秋山、こっちこっち。お前、久しぶりだなあ、どうしてるんだよ。

秋山 まあ今のところ、何とかストラだけは免れてるよ。

鈴木 いいよなあ、大手は。おれのとこなんか零細企業だから、月末がくるたびに、冷や冷やしてるよ。

相沢 それだって鈴木は、曲がりなりにも社長なんだから、大したもんだよ。

鈴木 何だよ相沢、曲がりなりにも、とは失礼だよなあ。(笑)

秋山 なあ、ところで、だれか渡辺のこと、知ってたか？

相沢 ああ、亡くなったんだってな。おれも同窓会名簿で初めて知ったよ。

鈴木 知ってたら、葬式ぐらい行ってやりたかったよなあ。渡辺は、おれたちとは全然違うタイプだったろ、だから親しくしてたやつも知らないなあ。

相沢 秋山こそ、時々しゃべってたじゃないか。卒業してから、会ってなかったのか？

秋山 いや、一度も。

鈴木 おれは、確か成人式の時、会ったような気がする。だけど、渡辺は酒飲まないからって、宴会に出ないで先に帰ったんだよ。あれが最後だったな。

相沢 ちょっと変わったやつだったよな。暗いっていうんじゃないけど、何かあんまり騒いだりしなくてさ。

鈴木 そうそう。休み時間なんか、よく本読んでたよな。もの静かなわりに存在感のあるやつだったよ。.....ほんと、早すぎるよなあ、死んじゃうなんて。

相沢 いや、おれらだって、気を付けた方がいいんだぜ。おれ、この間会社の健康診断でさあ、再検査のハガキが.....(FO)

ナレーション 結局、渡辺幸一郎の卒業後のことは、だれも知らなかった。でも、高校時代の彼のことは、意外なくらい、みんなが覚えていた。そんなふうには、何か不思議に印象深い男だった。そう、あれは高校2年の国語の授業の時のことだった。その当時の国語の担当教師は、毎時間、授業の始めに「3分間スピーチ」というのを交替でやらせた。内容は何でもよかった。人前できちんと自分の意見を発表する訓練、ということだったのだろうが、それぞれに性格が出て、なかなか面白かった。緊張してしどろもどろになるやつ、バカ話でお茶を濁すやつもいた。そんな中で、渡辺のスピーチは印象的だった。

(効果音) (回想シーンに入る効果音)

国語教師 えー、今日は、出席番号38番からだったな。えーと、渡辺幸一郎。

渡辺幸一郎 はい。僕は、今日皆さんに、一冊の本を紹介したいと思います。この『塩狩峠』という小説です。三浦綾子という作家の作品で、明治時代の北海道が舞台となっています。主人公は、鉄道に勤務する一人の青年で、彼は人間として、まじめに誠実に生きようとします。そしてある時キリスト教の信者になります。彼には婚約者がいますが、……(F0)

男子1 (ひそひそ声で) 何か、あいつ、マジで語ってない？

男子2 ほんと。弁論大会じゃないんだからさあ。

女子1 シーッ！ 静かにして。聞こえないでしょ。

男子1 ちえっ、なんであんなクソ面白くもないやつが、女子に人気あんだよ。

渡辺 (F1) 婚約者の女性は重病で寝たきりでしたが、彼は快復を信じて祈りながら待ち続け、ついに結婚できるまでになります。そして、いよいよ結納という日、婚約者のもとに向かう彼の乗った列車が、雪の深い急な峠で事故を起こすのです。それは、客車が機関車から離れて下り坂を逆戻りするという、恐ろしい事態でした。このままでは転覆すると判断した彼は、自分の身を線路に投げ出して車両を止めたのです。もちろん彼の命は犠牲になりました。けれども、そのお陰で何十人もの乗客の命が助かったのです。……そして、僕が一番驚いたのは、この小説が実話に基づいているということです。

ナレーション いつの間にか教室は、水を打ったように静かになっていた。みんなが彼の話引き込まれていた。もちろんおれも。

渡辺 主人公のモデルとなった人は、本当に自分を犠牲にして他の人々の命を救ったのです。こんな生き方があるなんて、僕にとっては衝撃でした。自分にはとてもまねできないと思う。でも、あこがれます。この本にこんな聖書の言葉があります。『一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一粒のままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。』(ヨハネ 12 の 24) この主人公は文字通り死んで、豊かな実を結んだ人だと思います。僕も、何か一つでも、後に残せるような、そんな生き方がしたいと思いました。以上です。ありがとうございました。

(効果音) (拍手)

ナレーション 正直いって、すごいと思った。同じ高校生で、こんなにまじめに考えてるやつがいるなんて、驚きだった。自分がひどく子供っぽい人間に思えた。その日の放課後、おれは思い切って、渡辺に声をかけてみた。

秋山 渡辺、ちょっといいか。……さっきは、ずいぶん熱く語ってたじゃん。

渡辺 そうかな、別に普通のつもりだったけど。

秋山 普通じゃないよ。普通の高校生は、生き方とか、そんな真剣に考えてねえも

ん。……その、何だっけ、お前が言ってた本の……。

渡辺

『塩狩峠』？

秋山

そうそう、それ。その話、実話だってほんとなの？ 何かすごいじゃん、その人。

渡辺

そう思うだろ。僕も最初に読んだ時は、何だか信じられなかった。でも何度か読むうちに分かったんだよ。彼は「死ぬ」ことを恐れてはいなかった、というか「死はすべての終わりではない」と信じていたんだって。

秋山

はぁ？ どういうこと？

渡辺

うん、彼はキリストを信じてたから、死んだら天国に行けると確信していたんだよ。そして生きているのもキリストのためだと考えていた。

秋山

お前、何でそんなこと分かるの？ もしかして渡辺もクリスチャン？

渡辺

いや、僕はクリスチャンじゃないよ。だけど、この小説を読んでから、『聖書』も読んでみたいと思い始めたんだよね。

秋山

ゲッ、なんか宗教って、恐くない？ 大勢で集まって、大声で何か唱えたりするんだろ。

渡辺

そんなことないさ。基本的に自分と神との、一対一の関係だろ。

秋山

ふーん、そんなもんかねえ。

ナレーション

そしてその数か月後、彼を印象づける、ある小さな出来事が起こったのだ。
(後編に続く)

< 後編 >

(効果音)

(高校 始業前のがや)

男子1

あーあ、今日は柔道のテストかぁ。

男子2

あれ、渡辺、柔道着は？

渡辺幸一郎

うん、忘れた。

男子1

お前が忘れ物なんて珍しいな。でも、今日はまずいぜ、テストだからな。

男子2

そうだよ、テストの時に柔道着忘れると、点数引かれるじゃん。しかも罰だとか言って、思い切り投げ飛ばされるしな。

男子2

お前、覚悟しといたほうがいいぞ。

ナレーション

おれの名前は、秋山真二。ごく普通の、少しくたびれたサラリーマンだ。先日、ふとしたことから、高校時代の同級生の死を知り、ショックをうけた。亡くなった渡辺幸一郎は、まじめで落ち着いた生徒で、クラスのみんなからも、何となく一目置かれていた。そして、高校3年のある日、彼に対する見方が決定的になる、ある出来事が起こったのだ。それは、体育の授業でのことだった。

(効果音)

(ピーッ 集合の合図の笛)

体育教師 それでは、先日予告した通り、今日は2人一組で柔道のテストを行う。呼ばれた者は、返事をして前へ出なさい。相沢・秋山「はい」、石井・加藤「はい」、菊池・佐々木「はい」、鈴木・高橋「はい」……(FO)……山下・渡辺「はい」、渡辺、おまえ柔道着はどうした？

渡辺 忘れました。

教師 テストの日に何だ、たるんでるぞ。よし、お前はおれが相手をしてやる。減点も分かってるな。……いいか、ほかの者もよく聞け。体育は大学受験に関係がないからといって、いい加減な態度で臨むようなやつは、おれは容赦しないからな。よく覚えておけ。

ナレーション その時、渡辺は一言も弁解しなかった。でもおれは前の日に、彼が隣のクラスのやつに柔道着を貸したのを見ていた。きっとあいつが返し忘れたんだ。先生に言えばいいのに。黙って減点されて、おまけに何度もぶん投げられるなんて、バカみたいじゃないか。……そう思いながらも、何も言い訳しない渡辺の態度が、とても潔く見えた。それ以来、おれの中で、彼の存在は特別なものになった。同い年のやつに尊敬にも似た気持ちを抱くのは、初めてのことだった。(回想から現実に)

ナレーション そしておれは、あの3分間スピーチの後の渡辺との会話を、ぼんやりと思い返していた。

秋山(モノローグ) あいつ、あれからクリスチャンになったんだろうか。……

ナレーション なっていてほしいと思った。あんなにまじめに人生を考えていたやつが、こんなに早く死んでしまうなんて、ひどく不公平のような気がした。きっと、将来を見据えて、目標に向かってコツコツ努力していたに違いないのに。せめて、クリスチャンにでもなって、「天国に行ける」と信じてこの世を去ったのでなければ、浮かばれない。彼の最後がどうにも気になり出したおれは、とうとう彼の家族に連絡を取ってみることにした。高校時代と同じところに、彼の父親がまだ住んでいた。

(効果音) (玄関チャイム ドアの開く)

秋山 ごめんください、先日お電話した。あの、…青春高校の……。

渡辺の父 ああ、いらっしゃい、秋山さんでしたね。よく来て下さいました。さ、どうぞお入り下さい。

秋山 失礼します。……このたびは……と言っても、もう3年前だそうですが、渡辺君のこと、心からお悔やみ申し上げます。同級だったのに、ちっとも知らなくて失礼いたしました。

父 いえ、とんでもない。お忙しい中わざわざ来ていただいて、幸一郎のやつもきっと喜ぶますでしょう。葬儀は、生前の本人の希望もあって、ごく身内だけで済ませました。あれも昔から、学校やお友達のことを、うちであまり話さなかった

ものですから、わたしらもどなたにお知らせすればよいのやら、さっぱり分からなくて。

秋山 そうでしたか。……あの、お線香だけでもあげさせて下さい。

父 はあ、それが、実は息子はキリスト教の信者になっていたものですから、仏壇はないんですよ。線香もお供え物も一切あげてはいかんと、これも亡くなる前から本人が強く申し出ておりましたんで。……とにかく、せめて写真でもみてやって下さい。

秋山 そうでしたか、渡辺君、クリスチャンになってましたか。

ナレーション そう言いながらおれは、心の中で「やっぱり」と思った。彼の写真の前に案内されると、おれはしばらく言葉を失っていた。そこには高校時代と同じ、穏やかで凛とした笑顔の彼がいた。何か語りかけてくるような、静かなまなざしだった。おれはそっと目を閉じて、心の中で彼に話しかけていた。

秋山(モノローグ) 渡辺、何でお前みたいなやつが、こんなに早く逝っちゃったんだ。高校時代に、お前ともっと話したかったよ。

父 さ、どうぞ、こちらでお茶でも。

秋山 ありがとうございます。……あの、お父さん、つかぬことを伺いますが、渡辺君はどうして……？

父 はい、実は胃がんでして、若かったもんで、気がついた時にはもう……。

秋山 そうでしたか。……本人は、病気のことは？

父 はい、全部話してました。医者にもいろいろと聞いてたようですから、本人が一番よく分かっていたんじゃないでしょうか。自分がいなくなった後のことまで、あれこれメモを残していきました。

秋山 そうでしたか。渡辺君らしいですね。

父 ええ、親のわたしが言うのも何ですが、よくできた息子でした。母親が早くに亡くなってますんで、「死ぬのは怖くない。ただ、おやじを独りにしてしまうのがつらい」と言っておりました。

ナレーション おれは、渡辺のお父さんに聞かれるままに、高校での彼の思い出を、次々と話した。と、その時、それまでうれしそうにじっとおれの話聞いていたお父さんが、突然こう言ったのだ。

父 でもね、秋山さん、幸一郎は本当は死んでないんです、まだ生きていますよ。

秋山 えっ、どういうことですか？ お父さん、大丈夫ですか。

父 いや、驚かせてすみません。別に頭がどうかしたわけじゃありませんよ、大丈夫です。実は、こういうことなんです。あいつは病気になる前から、もしも自分が死んだら、その体をこれから生きる人のために役立ててほしいと言っていました。ご存じでしょうが、アイバンクとか、ドナーカードとか、ああいっ

たものに登録していたようです。

秋山 角膜移植とか臓器移植とかですか……。

父 ええ、そういったことに、大変関心を持っていたようです。まあ、親としては、せめてきれいな体のまま、葬ってやりたいという気持ちがあったんですが、生前、息子と約束させられましてね。……今ごろはどこの方が、あいつの角膜を移植されて、目が見えるようになっているはずですよ。

秋山 ああ、それで、渡辺君はまだ生きています。

父 そうなんです。まあ、あいつはそういう言い方を嫌がるでしょうがね。「僕の命は天国に移されるんだから、その体の一部をだれかに提供したとしても、それはもう僕じゃないからね」と、わたしに釘を刺してましたから。このごろ、よくあいつが言っていた聖書の言葉を思うんですよ。『一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一粒のままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。』（ヨハネ12の24）というのをね。

秋山 一粒の麦…そう、そうでした。僕も昔、彼に聞いたことがあります。渡辺君は、まさにその言葉通り、人の ためになるものを残したんですね。

父 それはどうでしょうか。息子はたまたま、人様のお役に立つものを残すことができました。でもそれは、あの子の肉体のほんの一部でしかない。いや、もうあいつのものですらないのかもしれない。でも、あいつが話してた言葉とか、さりげない優しさとか、信念を持って生きる姿とか、そういう思い出は、確かにこの親の心の中に残っているんですよ。結局、人が残せるものっていうのは、生前の自分の生き方そのものなんだってことを、先に逝った息子から教えられたわけですよ。

ナレーション おれは、渡辺のお父さんの話を聞きながら、もう一度、おれの知っている彼の姿を思い出していた。高校時代の彼は、確かにそこにいた。そして、おれも。そして驚いたのは、すでにこの世にはいない彼が、今、すごい存在感をもっておれに語りかけてくることだった。

渡辺 (エコー) 『塩狩峠』という本にこんな聖書の言葉があります。『一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一粒のままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。』（ヨハネ12の24）この主人公は文字通り死んで、豊かな実を結んだ人だと思います。僕も、何か一つでも、後に残せるような、そんな生き方がしたいと思いました。(少し間)

この本を読むうちに分かったんだよ。彼は「死ぬ」ことを恐れてはいなかった、というか「死はすべての終わりではない」と信じていたんだって。(少し間) 彼はキリストを信じてたから、死んだら天国に行けると確信していたんだよ。そして生きているのもキリストのためだと考えていた。

秋山(モノローグ) 「豊かに実を結ぶ人生」、か……。渡辺は、あいつなりにそんな人生を生きた

ナレーション んだ。あの小説や『聖書』を読めば、おれにもその秘けつが分かるかなあ。
帰道、我が家に向かいながら、おれはそうつぶやいていた。

(完)